ならば、私が花を呼ぶ。

折り畳み傘は待ちぼうけ
小雨は降り止む気配が無い
背負った鞄も濡らさぬように
今日も大輪の傘を差す

不意に当たった雨粒は
かじかんだ手よりは温かい
水溜りに映る私から
下手くそな微笑みを返された

四季を巡らせる荒い口笛
三つの川の分水嶺
二人でどこまで歩こうか
一羽、あの背を追っていこう

雨和七瀬

花の雨を待つのはおしまいで
もう行かなくちゃいけないね
私が春の季語になる
そんな日がやってきたの

雨の匂いはもう分らない
傘の中で七色の雨音を聞く
俯いていたてるてる坊主
私が咲かす花を見ていた。